

講演 I 五感の恢復

時代の禁欲主義に抗して

ジエームズ・ハイジック

古い仏教説話に、荒れ狂う二頭の象に追われて井戸に逃げ込んだ男の話がある。身の危険を感じた男は、井戸の縁に垂れさがった藤のつるにしがみついてようやく追ってくる象の牙から逃れるが、見ると、白と黒の二匹の鼠が藤づるを食いちぎろうとしている。こうしているうちに、四匹の毒蛇が男めがけて壁づたいによじのぼりはじめる。井戸の底には龍が三頭、火を吐きながら爪をひろげて横たわっている。男が上を仰ぎ見ると、たまたま藤づるに蜂蜜が三滴ついていた。しばし休んで蜜の甘さを味わったところ、男はその一瞬すべての恐怖から解放されるのであった¹。

死が生を追いかけてくるということ、すなわち、われわれは生まれながらにして時間のとりこであり、まったく本意ながら、いつかは生命を手放さねばならないという事実は、宗教が見抜いてきた事柄のうち古今東西を問わずもともと根本的なもののひとつである。こういった厭世的な智慧を生る肯定に変えるためには、より広い視野を開かなければならな

いが、そういった視野を開く仕方こそが、重要な意味で、諸々の宗教の特徴を決定するのである。冒頭の譬話では、加筆された注釈によって、仏教徒の読み取る文脈は明確になっている。二頭の象とは生死輪廻であり、井戸とは無常・人間のはかなさである。白と黒の鼠はくる日もくる日も朝から晩まで人の生命（藤づる）をかじり取っていく歳月のことである。毒蛇は万物を生成し、また耐えず万物を分解する働きをする四大（地水火風）を表わす。三頭の龍は三毒、すなわち欲と怒りと愚痴である。これらは全体で、万物を取り巻く脅威すべてを表わし、脅威は単なる感覚の満足（蜜の味）によって一時的に延期されるのである²。

死を目前にして三滴の蜜を味わう男というこのイメージが人を惹きつけるのは、生の充足のさなかにあって生と死についての通常の観念への固着を「手放し」、その一瞬にすっかり自分を明け渡してしまうようにと、物語がわれわれに向かつて言わず語らずに勧告している点にあるように思われる。蜜

の味を楽しむことは、人生の意味を理性的に理解する義務からの解放を示すが、これはまた、人生の意味を理解したいという衝動から単に解放されるだけで満足してしまうことから解放をも指すと考えられる。逃げる男が蜜の味に夢中になっている間は、自分自身の救済で頭が一杯であるような状態から解放されているわけだが、実際のところ、現に生きている生身の人間としては、これ以上の救いはありえないであろう。救いの証明とは、悟りそのものではなく、悟りに取り憑かれ、悟りのことで頭が一杯になった状態を突破する単なる肉体的感覚の充実（しかもこの場合には、快い充実）に夢中になることにこそあるのである。

この「救いからの救い」を通じての救済という考え方は、かならずしも仏教の思想や慣習の主眼とするところではない。しかし、この思想のもとをたどれば、宗教体験という地盤の奥深く——すなわち仏教とキリスト教のそれぞれの根が渾然一体となって絡み合うところ——へ到達するのではないかと筆者には思われる。その単純ではあるがきわめて急進的な真理は、転ずれば今の時代がわれわれに課した禁欲主義の収奪から五感を取り戻すという問題に向かつていくのではなからうか。宗教的な悟りと体験が、人生に対する内なる眼の見方や、それに基づく道徳を、それどころかさらに、身体が世界を感覚する仕方までも変えるべきだ、という考え方は、われわれにとつて特に重要な意味をもつ。もし味も香りも感触も、

みな以前と同じであるならば、はたして洞察や道徳に、救いとしての価値があるのかどうか疑わしい。宗教の真理をはかる尺度として、教えが伝統と一致するかどうかという「正統」(orthodoxy)に加えて、その教えに基づいた行為が伝統の道徳的理念と一致するかどうかという「正行」(orthopraxis)という概念も打ち出されてきたが、真の五感の解放つまり「正感」(orthoesthesia)という尺度を抜きにしては、なお不完全である。

『ジャータカ物語』には、初期の仏教の伝承における、行為 (praxis) と感覚 (aesthesis) との関わりを描いた物語がある。ある王が、より正しく国を治めるために自分の不徳を教えてもらおうと、修行中の菩薩を探しに身分を隠して出かけたという。菩薩は王に熟れたイチジクの実を差し出す。王はイチジクを食べ、その甘さに驚く。菩薩いわく、「今は王さまが正しく公平に国を治めておられる。だからイチジクが甘いのです」。

「王さまが正しくないときは、甘くないのですか」、王がたずねると、菩薩が答えていわく、

「そのとおりです。王さまが正しくないと、油も蜂蜜も糖蜜なども森の木の根や果物も甘味や風味がなくなります。国が正しく治まっているときは、それらは甘く風味のあるものとなるのです」。

これを聞いた王は宮殿に帰ると、菩薩の忠告が本当かどうか

か確かめようとして、不法な政治をはじめた。すると果物は本当に苦い味がした。それから王がまた正しく国を治めはじめると、果物は甘さを取り戻した。

イチジクの味がもとに戻ったのが、道徳の恢復をあらわす単なる象徴でないことは、道徳的な行動が心の状態をあらわす単なる象徴でないのと同じことである。両方とも宗教的な体験や悟りを実際に確認するものである。もし真の正義が自覚を具体化するものであれば、真の味わいもそれと同じである。藤づるにしがみついて蜜の甘さを楽しむ男は、正しく高潔に国を治める王と同様、彼の自覚の正しさを確証しているのである。

『ブッタチャリタ』で詩人アシュヴァゴーサが書いた釈迦の一生の話では、順序が逆になっている。ここでは、奪われた感覚を取り戻す場面が、世の中で慈悲の生活をしていこうと決意する場面よりも先に描かれている。そのため、若き王子ゴータマの最初の決意と悟りを得た結末との対比のおもしろさが際立っている。出家しようとして心に決めた王子は、友人チャンダカの剣を借りて自分の髪の毛を剃り、それを湖に投げ込んで決意のほどを宣言する。

「生死の海を越え渡り、その後には還ってこよう。もし願いが果たせなければ、この身は山林の間に滅するであろう」。

こう語ると、王子は人々と別れて森へ行き、そこで目的を達成するために苦行の生活に入る。最初の決心とその苛酷な

禁欲主義にとりつかれた彼が、その呪縛から解放される段階ごとに——覚者として完全な悟りをきわめるまで——悟りには自然界の反応が伴う。月も星々も一段と輝きを増し、諸天は空中に芳しい天花を降らす。夜が明け、大地は酔った女のように打ち震え、雲なくして香雨が振りそそぐ。

この詩の作者の意図を理解するには、釈迦が、その影響力があまねく諸天界・地上界を通じて拡がるような普遍的な賢人であるとみなすだけでは不十分である。自然界の反応は、自覚を得るに際して王子がついに「感覚」をも開いたことを示唆しているのである。釈迦が人を導く者となり、「暗黒の世界に不滅の法を説く太鼓を打ち鳴らそう」と心に決めたのは、その直後のことであつた。救いとは、肉体を棄て、心を麻痺させた衆生のためではなく、自覚ある者すなわち「有情」のためのものであり、失われた感覚の恢復なしにはこの救済はありえないのである。

釈迦は当初、生死の超越をめざして出立したのであつたが、実際にはこれを超越することはなかった。生はつづき、死や老いや病が生ともにあつた。いかに悟ろうとも時の輪を止めることはできない。もし生死を見極めたとしても、それだけでは救いにならない。万物の無常を看破した者にとつては見るものも聞くものも、味や香りも、感じるものも、すべてが、きつとこれまでとは異なつて——それが快樂であろうと、苦痛であろうと——感じられるにちがいない。仏眼を開くた

めに抑圧されていた王子の頃の感覚と、いったん覚者となつてから再び解き放たれた感覚との間には、天と地ほどの開きがあるのである。悟りを得た釈迦にとって、月はその輝きを、花々はその香りを取り戻し、雨はさわやかさを、大地は生氣を取り戻すのである。蜜の雫なしでは、悟りは古い井戸に囚われて、四方八方を危険に取り囲まれること以外の何ものでもない。人が五感を満足させようとすればするほど、無明は感覚を曇らせるのであるから、反対に、悟りの光明は感覚を再び生き生きとさせ、さらに感覚を磨き澄ましてくれるにちがいない。さもなければ、悟りはただ合理的なものと非合理的なものとの境界線を変えることにすぎないであろう。

一

キリスト教の神秘主義の伝統にも、一種の宗教体験の「証明」としての五感の恢復についての独自の表現がある。十三世紀のフラマンの「愛の神秘主義者」たちの間には、その例が数多くある。この点で殆どその対極に立っているのが、ライン地方の神秘主義者たちである。彼らにとって、視覚は、神秘的な洞察という内なる視覚に対する主たる比喩であり、時空や肉体からわれわれを引き離す、砂漠の空の乾いた閃光であるかのような魂へと、また至高の實在の純粹な光へと注意を向けていた。行為に役立つ瞑想の重要性を強調するエックハルトのような人物の場合、宗教的変容の奇跡は魂——人

間と「全被造物のうちでもっとも高貴な、純粹に靈的で肉体的なものは何ももたない」者である天使とが共通にもつているところのもの——に残される。フランドル地方の神秘主義者の場合はこれと異なり、靈的な洞察と靈的な言語とが、しばしば触觉と味覚という肉体的領域において生じた変貌をあらわす比喩の働きをしているように思われる。

歴史上、ハードウィックという名で知られている十三世紀の神秘主義者の幻想が、この点を雄弁に物語っている。十二世紀の終わり頃、新しい生活様式を求める貴族や上流階級の家女性の女性たちの間で、ひとつの運動がはじまった。城や修道院に引き籠もることを拒否した「ベギン」と呼ばれる在家修道女たちは、簡素で観想的な共同生活をめざした。ハードウィックはそのような共同体のひとつに属していたが、空想的な愛の理想と宗教的体験とを極端な形でひとまとめにして表現したため、結局追放されてしまった。

当時公に復活しはじめていた求愛をめぐる疑惑と興奮との典型を描き出した書である、詩人ゴットフリートの中世の恋愛物語『トリスタンとイゾルデ』は、信者が聖餐式のパンに見いだすのと同じ滋養分が、エロティックな体験を通じて、高貴な魂に与えられることを示唆している。ハードウィックにとって、それはどちらかにするというような問題ではなく、両者が互いに他を所有し合うという「完全な所有をとまなう統一」という形が一体化することだった。彼女が七番目

に見たという幻想はその顕著な例である。

聖霊降臨祭の日曜日の早朝礼拝の祈りの最中に、彼女は強い期待に圧倒される。その期待に彼女は、「私の心臓も血管も手足も、熱い欲望に震えおののいた」のだった。一羽の鷲が彼女に現われ、もし統一が欲しければ準備するようにと告げる。そして、鷲はキリストに語りかける。「では、完全な所有をとまなう統一という仕方での統一性を結合する、汝の大きいなる力を見せよ」と。キリストは、礼拝堂の自分の席にぬかずいているヘッドウィックのところへと、祭壇から三度降りてくる。まず最初、キリストは三歳の子供の姿で現われ、聖餐式のパンと葡萄酒を彼女に差し出す。次に彼は成人の姿で現われ、宗教的儀式の形で彼自身を与え、最後には完全な肉体的結合という形で彼自身を与える。

それで、彼ははじめて私たちに体を与えられた日のように、男の衣服を着た姿で来られました。人間のように、しかも素晴らしく美しい男のように見える彼は、神々しい顔で、人にかしづく者のように謙遜な態度で私の方へ来られたのです。それから習慣どおり外的に秘蹟の形で御身を私に与えられ、次に習慣どおり杯から飲むために形と味わいとなって与えられたのです。その後、彼御自身が私のほうへ来られて、私を腕にすっぽり抱き締められました。私は、心と全人間的な望みに従って、至福のうちに自分の全身で

彼の全身を感じました。こうして私は外的に満足し、すっかり我を忘れたのです。

この恍惚感が消えると、別の形ではあるが、もとの感覚がひとつひとつ戻ってくる。幻は、ウイリアム・ブレイクの言う束の間の「知覚の扉の浄化」で終わるわけではなく、古い習慣を新たにするのである。

またその時、しばらくの間、私にはこれに耐える強さがありました。しかし、間もなく外見上彼の姿にあの雄々しい美しさがなくなりました。彼がすっかり消え去るのが見えました。あまり急に遠ざかって消えてしまわれたので、彼は私の外側には見えも感じもしなくなり、もう自分の中にいるのが自分なのか彼なのか、さっぱりわかりませんでした。それからまるで二人がびったりと一体になったように感じました。それはつまり、こういうことです。外的な秘蹟を授かる時に見たり味わったり感じたりするように、外的に見、味わい、感じるのです。最愛の人が愛する人と一緒になって、各々が完全に相手を受け入れて見たり聞いたりすることにすっかり満足できるように、完全に相手を受け入れ、一方が他方の中に溶け込んでしまうことなのです。

聖体拝領の際のハードウィックの感覚の恢復は、宗教体験が通常の感覚の体験をいかに変形させるかを示す、驚くべき事例である。意識をもった自己を越えて忘我の境地に至った結果としての状態、「自分自身の中に、もはや自分というものは何も残っていない」といった状態は、それが道徳意識からかけ離れているのと同じように、快樂主義からも程遠い。悟り切った心の美しさが自然にあふれ出て、人間社会における慈しみや愛の実践になるように、日常の決まり切った仕事や月並みな通念によって力を削がれた五感も同様に、再覚醒へともたらされるのである。恢復という言葉には、本来もっていたものがすでに失われてしまっているという言外の意味がある。そして宗教体験における恢復の場合、この喪失が、単に無知や罪のためばかりではなく、身体との接触の欠如に対して、洞察が欠けていたり、霊的な愛が盲目であったりするためでもあることが、さらに示唆されている。

二

現代の消費社会とは、一方では商品やサービスをががつつと食い漁り、他方で自分が廃棄した物を恥かしげもなく放り出す巨大な獣のようなものであるとは、人間生活の質を懸念する倫理・宗教界のリーダーたちが今日専ら語っているところである。人間社会を、地球から食物を摂り、利用可能な資源を求めて別の人間社会と競争しないしは協力するような一つ

の体、すなわち、世界中のあらゆる社会に対して、また現代の自然観に対して責任をもっている倫理的団体……であるとなす考え方がなされるようになってから、まだ百年にもなっていない。しかし、今世紀の終わりまでには、この考え方はおそろく常識となるであろう。

消費社会に向けられた道徳的な憤怒の声は、当然、もっとも高度な消費社会に属する人々の中から一番強くあがっている。科学技術が簡素で、消費の度合いも低い社会のことを何の躊躇もなく賞賛するのは、必要物資を欠く人々よりも、物資の豊富な人々なのである。しかし、豊かな者の良心の痛み的小ささに比べると、自らを「低開発」であると考えるようになってきた人々に対して、豊かな人の消費パターンがもっている魅力は遥かに大きい。E・F・シューマッハーの「適正技術」あるいはイヴァン・イリイチの「生活経済」へと回帰しようという思想は、「開発」の犠牲者よりも受益者から強く支持されてきた。この意味において、自分たちが過剰消費をしていると考える人々と、過小にしか消費していないと考える人々との間のギャップは、その溝を埋めようと意図したまさにその思想のゆえに、さらに拡がっているのである。

こういった皮肉な事態が起きることは、思想上さほど珍しいことではない。この皮肉な事態の背後にある考え方、つまり実際には文明を形成した時代と場所とにまったく特有な思想を一般化するという傾向は、むしろ文明が始まって以来、

繰り返して起っている現象なのである。われわれの二十世紀の文明の場合には、科学的データの客観性やデータを収集した専門家の意見の正しさが暗黙のうちに信じられてしまふという傾向のために、現代の諸々の洞察を普遍的な元型にすり替えてしまふということが、常識となっており、現に実に容易に行なわれてしまつてゐる。たとえば、惑星としての地球の生態圏と大気圏との取り返しのできない破壊に関する「データ」(「所与」)を利用する権限が与えられている特定の国々は、自国の大義名分を果たすために「把握したもの」であるこの「客観的データ」が実はどのように用いられているのかということをよく見極めなければならぬ。もちろん、実際に蓄積されたデータを無視する必要はないが、このデータを使用する仕方がその文明の特殊性に刻印されていることを忘れてはならないのである。

言い換えれば、現代文明を「消費社会」として批判する洞察は、たとえ旧来の殻を破つて他者から信じさせられてきたこと以外のことを信じたがっている個々の消費者にとつて否定できない明瞭な洞察であつても、それ自体やはり影の側面をもつてゐる。筆者はこの影の側面に立ち入つて、上の洞察を開いた人々の頑固なお説教から出口を見出してみたいと思つて。もう少し具体的に言えば、現代の消費習慣は、実質上東西の禁欲の伝統の中でも最もきびしい荒行の部類に属するということ、しかもそれが集団的に行なわれている苦行に他

ならないというように考えてみたいのである。企業という怪物の肉食の話から、個々の市民が被つてゐる収奪という問題へと焦点を移すと、ここには、科学技術の支配のもとに生み出された普遍的原理の名のもとに世界の良心を監督するということをせざるも、満足のためのより高度な手段を取り戻す希望があると、筆者は考えてゐる。

現代の生活の禁欲主義は、せいぜいその古典的宗教の禁欲主義の戯画にすぎない。その理由は簡単であつて、それが禁欲であるということにすら気がつかれぬままに行なわれているからである。文明世界の真只中に住むことを選び取つた人々は、強烈な孤独や諸欲の減退、不感症に悩まされるが、その度合いの強さは、目覚めていて感じる苦悩によるよりも、かゝつて、これらのものが人々をどれだけ無感覚にさせるかというその程度によつて、よりよく測ることができる。日々の禁欲主義は、神聖な行事という理想からはほど遠く、決まり切つた仕事への服従、すなわち内的な不毛さの外的な兆候でしかないのである。

収奪の兆候は至るところに見られる。マスメディアから一方的に流される情報量が増加するにつれて、人間同士の温かい触れ合いが失われていく。受験競争のおかげで勉強を愛する心は萎え、学歴の役に立たない情操・感性教育は眨められる。新鮮で加工されていない食物は安価な加工食品より遥かに高く手が出ない。人工の光線やエアコンのおかげで季節

感は失われる。人工の香料の登場によって、本物の香りの多くが不潔なるもの、あるいは嫌な臭いであるかのよう思われてくる。人間の手足の代用となる機械は時間を稼ぎ出してくれるかわりに、身体の優雅さを職場からしだいに追放し、それをスポーツジムや運動場のものとして規定し直す。仕事が賃金を稼ぐことの代名詞となることによって、自分や家族の生活の糧のために額に汗する生産の喜びや満足が奪われるのも必要悪と考えられるようになり、身体を物象化する傾向がさらに強化される。つまり、こうした条件で「フルタイム」の雇用をするということは、個々の労働者を「フル」に雇用することを強制的に放棄することに事実上等しい。それにまた、音楽や歌が、それを再生する機械装置、あるいは、カラオケの場合のように、それをより満足できるものにするための機械装置と同一視されるようになるにつれて、生演奏をする楽しみ、そしてそれを聞く楽しみも玄人向けに限られたものとなり、出費を賄うる人にしか楽しめない贅沢になるのである。

物や人に対する批判能力の面でも、同様の剝奪が横行している。物を買うときにはラベルの品質保証表示に頼る。何度欺かれようと、別のラベルを信用しては結局また期待を裏切られるのである。高学歴のレッテルも、当人の知性の能力を欺く仕掛けでしかない。あやふやな価値判断の基準に頼ることなど、終わることのない悪夢以外の何ものでもない。コン

サルタントにばかり頼ってしまっていては、常識や経験の出る幕はないのである。

自らの欲に媚び諂い、あるいは他者の欲の餌食になることを避けるとき、われわれはしばしば単に欲を麻痺させているにすぎない。乗り物での移動速度が超人的になればなるほど、物資やサービスが増えれば増えるほど、靈魂はますます一種の寝呆け歩きで重い体を引きずって行くかのようになる。これが筆者の言う、現代の禁欲主義の意味するところである。

この狂言を支えている環境は、そこから餌を得ている企業に限られない。人々が次第に目覚めつつあるように、個々の心の態度の協力も要求されているのであり、しかもそのような協力を拒否する可能性は個人の選択の範囲内にある。感覚の収奪に抗する選択を行なうには、社会構造の抜本的改革を待つ必要はない。個々の決意によって、より簡素でしかも十分に満ち足りた生活の仕方を目指す、ささやかな改革を始めることができるのである。このような改革を具体的な行動に移せば、現在の痛みの少ない無意識の禁欲に代わって、痛みのより大きい意識的な禁欲を生み出すことにしかならないのではないか、と思われるかもしれない。それゆえ、この危険から逃れる手立てとして、感覚ないし五感を積極的に回復していくことが大切であると筆者は主張したい。

現代の五感の働き方に代わるべきものをできるだけはつきりと思い描くために、先ず第一に収奪の呪縛から目覚めなく

てはならない。つまり、眼を閉じて、よく擦ってからまた開き、これまで味わい慣れてきた喜びが、幸福を求める本来的で素朴な欲に対する強烈な禁欲主義をどのように養っているかを見るのである。そのような日常の世界の見直しが、高次の意識という高嶺に至るための一種の準備段階にすぎないと考えることは、そもそも間違っている。それは常に繰り返し取り組まれるべき問題なのである。ただし、たとえ日常生活の中における経験の直接性の味わいが洞察の深さを測る尺度であると思なされても、習慣への服従が安楽で放逸的であるのと同じだけ、習慣からの解脱も困難で過酷な営みなのである。この意味で禁欲主義的な大食の習慣やその背後にある通念を放棄する道を歩み始めるに当たって、感覚の恢復を象徴する模範の導きが必要となる。こうした模範の探究は、キリスト教と仏教がこの時代に共に直面していながらも、これまで真剣に応じることのなかった道徳的な挑発であると、筆者には思われるのである。

三

感覚の恢復といった幅広い主題を再び取り上げるにあたって、実現可能な代替的社会構造をどうすべきかという問題——結局生ぬるいものではだめで、徹底的な社会構造の变革が必要であろうが——にまで触れるとなると、本論が一步も先へ進めなくなってしまうことは確実である。筆者には手近に

そのような方策はなく、実のところ、われわれの現在の状況においてそのような方策を産み出せるかどうかには、疑いを抱いている。われわれの置かれた立場をできる限りはつきりと見極め、また生きるすべを提供してくれる過去の最良の理想という光のもとに、われわれの苦境を照らしだして見ることが有効であると思われる。筆者の理解するところでは、宗教的伝統のある教典を「聖典」と見なすのはまさにこういったことであって、時代を超越した、縫い目のない織物のような完全な真理を尊重することではない。暗闇をあかあかと照らすたいまつとしてではなく、まわりを囲んで集まり、時ならぬ考えに思いをめぐらせる囲炉裏の、仄かなながらも心を誘う明かりとして、われわれはこのようなテキストに頼るのである。

一九四五年にエジプトのナグ・ハマディの古代図書館で発見された二世紀のコプト語の写本であるトマスの福音を丹念に読み、筆者は、悟りと感覚との関係を表わす難解なイメージや見慣れない言葉という牢獄の格子の間から、きわめて神聖な本質が垣間見えることを確信するに至った。テキストにはその起源や構成、翻訳について十分なことが書かれており、私自身が細部にまで分け入って調べる労を省いてくれた。しかしながら、その福音にある、感覚についての教義はまた違ったものであり、それを再発見するためにはかなり徹底的な見直しが必要である。

先ず、現代の解説者は再帰人称代名詞 (self) を名詞 (self) に転用することによって、テキストの中に「自己」という慣れ親しんだ概念を見いだして、安んじてきた。「自己知識」「自己実現」「自己発見」が「自己」の知識、実現、発見に転ずる過程はまことに自然であつて、西洋ではフィヒテが近代哲学に「自我」の概念をもたらして以来ずっとそうだったわけであるが、今日の読者にとっては空気のようにほとんど意識されることがない。ここまで来れば、グノーシスが原始的な深層心理学に他ならないという理解までは、あと一息である。トマスの福音と東洋哲学が實際歴史的に結びついているということを証明するのは容易でないが、この両者の間に見られる内的な深いつながりが、上のような読み込みを支持するように思われる。そして、トマスの福音に含まれている、これまで解釈されてきたものとはまったく異なつた——そして筆者の信じるところでは現代にとつて是非とも必要な——「自己」の概念が最終的に翳つてしまうことにならなかつたとしたら、このような読み込みも、大した問題とはならなかつたことであらう。

十分考へもせずこのテキストを現代心理学の範囲に引き入れて解釈するという学問的態度の背後には、もちろんグノーシス主義の明らかな影響がある。グノーシス主義にとつては、肉体も霊もともにデミウルゴスの創造したものであり、高次の「内なる生命」の名のもとに克服されなければならないも

のである。その禁欲主義の焦点は単に肉体に向けられるのではない。隠れた本来の内なる本質を蘇生させるために、古い衣のように投げ捨てるべき心身のあり方にこそ向けられているのである。ギリシアの著述家や翻訳者には、アジアの言語にあるような豊富な術語が欠けていたため、人間存在の根源である非世界的なものを語るのに、耳慣れない言葉に置き換えることで我慢しなければならなかつた。人間の自然的な生命はプシューケーと呼ばれ、超自然的生命はプネウマ (聖パウロにも採用されている語法) と呼ばれた。しかも、たとえハンス・ヨナスの言うように「グノーシス主義の核心は、人間の内なるこの超越的な原理を発見し、なによりもその運命に関心を寄せるところにあるといつても過言ではない」と認めたとしても、それは、この原理が個人の所有物であると考えられることを正当化するわけではない。プラトンやアウグスティヌスの言う内なる霊が、個人の人格より一段高い「内なる神」を表現したのと同様、マンダ教の「マナ」の概念も、この内なる原理と至高なる存在との同一性を確立したのであつた¹¹。種子のように無意識の状態で、意識という輝かしい太陽を待ち、やがてはその光を浴びることによって、その内に潜んでいた力が解き放たれ、調和のある統合された自己へと変容する元型的な個という概念は、むしろもっと現代的な個の理解を必要としたのである。

しかしながら、トマスの福音および同書が感覚について語つ

ているところにとつてよりいっそう重要なことは、肉体と靈とに關するグノーシスの考え方の「影響」が、紀元一、二世紀のキリスト教徒の著者によつて無批判に受け入れられたわけではない、ということである。周知のように、もしイレナエウスやヒッポリトス、エピファニウスらによるグノーシスに対する批判的抵抗がなければ、グノーシスの明確な像を組み立てられるためにわれわれが入手できる情報は、きわめて少なかったことであろう。しかし、このことは、グノーシスの文献からもつとも強く影響を受けた人々が、自分たちが取り入れるものに対して同じ程度に批判力がなかったという仮定を正当化するものでは決してない。學者たちは、そのようなことが起こつたということに原則的に同意しているが、實際には、そのようなことが起こつた場所や状況を正確に示す証拠はほとんど提出されていないのである¹⁾。

グノーシス主義と積極的に接触しようとしたキリスト者たちにとつて、この接触の過程における主たる関心事は、正典の福音書への忠誠にあつたわけではないし、そうかといつて、何かある特定のグノーシスの宗派に対する忠誠にあつたわけでもない。トマスの福音が、今日知られている福音書よりも古い資料を入手していたという可能性について、學者たちはさまざまに推測をめぐらせ続けているが、グノーシスやマニ教のさまざまな集団において同書が読まれていたということに關しては、意見の一致を見ている。²⁾トマスの福音の著者

(あるいは著者団)はキリスト教とグノーシスの両方の資料を選択しつつ利用していたと考えられるが、それは、二世紀後半頃というこの書の成立時期ばかりでなく、シリア東部のキリスト教社会で同書が使用されていたという事実によつても支持されるであろう。

グノーシス主義には一般に感覺の世界を毛嫌いする傾向がある。それがキリスト教の影響によつてどこまで軽減されたかという問題はさておくとして、トマスの福音にはこの点でグノーシス主義からの影響が皆無といつてよいほどである点が注目される。グノーシスのこれほど中心的な要素がトマスの福音に欠落している理由は、グノーシスの見解を計画的に注意深く見直していくことによつてのみ、説明可能になるであろう。グノーシスは復活を説いたキリスト教の神学に反対するといふ目的を有していたが、トマスの福音は、その同じグノーシス主義が使用している比喩の助けを借りながらも、グノーシスとはまったく正反對の目的を果たした。換言すれば、ちょうどグノーシスの教えがキリスト教に「飽食してうんざりした者のための食物」を与えるべくキリスト教の教義の意味を逆転したように³⁾、トマスの福音もまた感覺に対する抑圧からの解脱を説くために、グノーシスのイメージを使うことによつて、グノーシス主義に一矢を報いたのである。

キリスト教思想に対するグノーシスの「禁欲主義」の影響が、五感の抑圧という形を常に取つていたのかどうかはまっ

たく明らかではない。(トマスの福音の一世紀後に書かれたグノーシス主義の色彩の濃い『ピリポの福音書』は、イエスがマグダラのマリアの口に接吻して弟子たちの気分を害するという強烈な場面を含んでいるのではなかったであろうか?) 感覚の役割ということに関しては、グノーシス主義そのものが必ずしも一枚岩ではなかったし、それに関心をもったキリスト教の著作家たちが、キリスト教と比べて肉體性をより脱しており、精神性をより重んじていたグノーシスの傾向の方にいっそう好意的であつたという証拠もない。

われわれ現代の科学・技術の神話もまた、同じような神秘性に囲まれている。その紛れもない魅力と効果にもかかわらず、われわれの神話は野蛮で、横暴な側面も有している。このことは、宗教が現代の神話から批判的な距離をとると同時に、それに対して批判的に反応することを要求する。私の目的は、一種の禁欲主義が引き起こす五感の乏しさや感覚の貧弱さが、現代の神話のもつ暗い面の一部に他ならず、まさにそれ故にこそ、グノーシス主義の文献の一部がわれわれの福音であるということを示唆することであつた。ヨーロッパおよび北米南米における農村信仰の「異端」は、キリスト教の神学が忘れていた自然の聖性を長期間にわたって生かし続けてきた。これと同様、「発展」の魅力に誘惑され、それに呑み込まれてしまうことが、われわれと比較してまだはるかに少ない諸民族の文明の中には、いかにして現代の禁欲主義が

ら自分たちを引き離すことができるか、いかにして仏教やキリスト教のような伝統に五感に対する関心を恢復することができるかなどについて、われわれの学ぶべきものが多くあるに違いない。

註

1 九世紀の『翻訳名義集』より (F. 51. 1160)。本書は、巨大な Mahasamhitā-sūtra の六世紀の後半に編集された漢訳である『大方等大集經』を引用しているが、この漢訳は徹底的に調査したにもかかわらず、結局発見できなかった。註釈は天台宗的である。この話の異形の一つのが『寶頭盧突羅闍爲優陀延王說法經』(T. 32. 787a) に含まれているが、そこでは、話の終わりの部分で、避難者が案にされるかわりに、蜂が巣からたくさん出てきて避難者を攻撃することになっている。私が使用した文章と殆ど同じ話が、同じく六世紀に吉藏が三論宗的な立場から『維摩經』の解釈として書いた『維摩經義疏』の中にも現れている (F. 38. 334c)。特に注目を呼ぶのは、維摩が身体の嫌悪を説いて身体を「古井」に譬るといふところで、吉藏が反対の意味をもった話を連想しているといふことである。E. Lamotte (*The Teaching of Vimalakīrti*, trans. by S. Boin, London; Pali Text Society, 1976, 37, note d.) は、鳩摩羅什の弟子が四世紀に引用した同形の話を指摘している (T. 1775. 342b)。いっでも吉藏の場合と同じように、避

難者が蜜を口にするとその恐れが全て解消されるので、この終わり方がオリジナルに忠実であると思われる。

この話の一番よく知られている英訳は Paul Ropp's の *Zen Flesh, Zen Bones* (Garden City, N.Y.: Doubleday, n.d., 122) に含まれているが、象と井戸と蜜に代わって虎と崖と蕁が使われているし、著者がそれを誤って『沙石集』の話として紹介している。とにかく、話そのものが非常に古くて、仏教以前から伝わるものとも考えられるので、その異形が存在することも不可能なわけではない。

『わが懺悔』の中でトルストイは、東西の智慧をもってしても打ち勝つことのできなかった、自分の絶望との戦いを語っている箇所、上に引用した『翻訳名義集』と同じ話を引用する。W・ジェイムズはトルストイの絶望の真剣さに触れる際、この文章を指摘するが、それはトルストイが結局のところ、人生の簡素な楽しみの再発見によって絶望から解放される、ということ論ずるためであった。「トルストイは、現代の洗練された文明の空しさと不まじめさ、貪欲さと錯雑さと残酷さとに対して深刻な不満をいだき、永遠の真実はもっとと自然でもっと動物的なものの中にあると信じた原始的な剛直な人々の一人であった。…それはおそらく、私たちが骨のなかに本来の肉体的な髓を十分にもってはいないからであろう、けれども、私たちのほとんどの者が、少なくとも、もしそうできたらどんなに善いことだろう、と、感じているで

あろう。』宗教的経験の諸相」、樹田啓三訳（東京、日本教文社、一九六二）、二二九、二七七―七八ページ。ただし、強調は筆者による。

2 この話に登場する諸象徴は極めて古いので、仏教及び仏教以前の伝統のうちで意味の一貫性を求めるのは無理かと思うが、しかし五感の虜である人間を古井戸に閉じ込められた人の如きものとするという寓話は所々に現れてくる。例えば、『大乘菩薩藏正法經』にも同じイメージが見られるし、ここでは鼠と蛇が「老病死苦」を象徴している (T. II, 48c)。

3 松村恒・松田慎也訳、『ジャータカ全集』四巻、三三―四、一―三―五ページ。釈尊は、菩薩が自分で、王がアーナンタだったと、最後につけ加えている。

4 *Buddhacarita*, 473-8. 漢訳の『佛所行讚』は梵語の象徴を単純化したり、略したりしているので、英訳から引用する。梵語からの英訳は、E. Conze, *Buddhist Scriptures* (Hardmondsworth: Penguin, 1959), 47-51.

5 仏典にも、視覚に感覚一般を代表させる同じ傾向がよく見られる。例えば、註2に引用した経では、五感がいつも「眼等」と呼ばれ、ただの「夢」か「電光」か「幻」かあるいは「体不實の芭蕉」等になぞらえる (T. II, 80a-b)。ここでは、比喩が理論に対して与えている影響を度外視してはならない。なぜかと言うと、五感の働きの乏しさの原因を無明に帰する無反省な傾向が、メディアや交通制度が引き起こす

現代の大衆の麻痺に、宗教的な支持を間接的に与える可能性
があるからである。こういう点に心を配るならば、おそらく
「仏眼」に、仏鼻、仏舌、仏耳などをつけ加えることができる
であろう。下記の註25-26と、これらの註が付されている
箇所の本論の叙述も参照されたい。

6 *Sermo 40*(Pfeiffer), M.O'C.Walsh, *Meister Eckhart:
Sermons and Treatises* (Longmead, England: Watkins, 1987)
, vol.1, 283.

7 ゴットフリート・フォン・シコトラーズブルグ『トリスタ
ンとイゾルデ』石川敏三訳(東京、都文堂、一九七六)、一
三〇-四〇:五ページ。

8 Hadewijch: *The Complete Works*, Mother Columba
Hart編(New York: Paulist, 1980), 280-2. この例を初めて私に
紹介したPaul Mommaersは、ヘートウィックの幻となった
ものの背景にある歴史を詳しく説明している。"Hadewijch:
A Feminist in Conflict," *Louvain Studies* 13(1988): 58-81.

9 これ以降の註に指摘する参考文献の中にも訳文を含んで
いるものがあるが、本論文が掲げる訳文は、権威ある翻訳と
して定着してきた。Coptic Gnostic Library, vol 20, *Nag
Hammadi Codex II*, 2-7, Bentley Layson 編(Leiden: Brill,
1989)に従い、邦訳(ニトマスによる福音書)、荒井献訳、『聖書の
世界』第五巻『新訳I』の訳文を所々調整したものである。
なお、番号はコプト文章通りである。

10 エトラス・ペイゲルス『ナグ・ハマディ写本』 荒井献、湯本和子訳（東京、白水社、一九八二）、二三九ページと第七章。R. Winterhalter (*The Fifth Gospel*, New York: Harper and Row, 1988) は深層心理学の「真の自己」という概念をはじめ、種々の現代思想を遠慮なくトマスの福音の文章の中に見い出す。これと対照的なのが、コプト語文章に対する浩瀚な注釈書 (*Das Thomasevangelium*, Munster: Ashendorff, 1991) を著した Michael Fieger であり、彼は先駆者である Robert Grant と David Freedman 著の *The Secret Saying of Jesus* (London: Collins, 1960) に依拠して（デルフィ神託の「自己を知れ」誤解までも）、現代心理学を完全に避けている（28を参照）。

11 ハンス・ヨナス『グノーシスの宗教』 秋山さと子・入江良平訳（京都、人文書院、一九八六）、一七四―五。プラトンとアウグスティヌスについては Charles Taylor, *Sources of the Self* (Cambridge, Mass: Harvard University Press, 1989) 六―七章に詳細な説明がある。トマスの福音の場合は、コプト語版はキリシヤ語の原文の後代（約四世紀から）の翻訳であって、残っている原文の断片だけからすれば、「からだ」と「こころ」とを明確に区別する用語を確定することはできない。

12 グノーシス主義とキリスト教の相互的影響に関する研究や様々な仮説の批評については、Hugh Montefiore and H.

E. W. Turner, *Thomas and the Evangelists* (Naperville, Ill. Alec Allenson, 1962) 47. 48. 49. 50. 51. 52. 53. 54. 55. 56. 57. 58. 59. 60. 61. 62. 63. 64. 65. 66. 67. 68. 69. 70. 71. 72. 73. 74. 75. 76. 77. 78. 79. 80. 81. 82. 83. 84. 85. 86. 87. 88. 89. 90. 91. 92. 93. 94. 95. 96. 97. 98. 99. 100. 101. 102. 103. 104. 105. 106. 107. 108. 109. 110. 111. 112. 113. 114. 115. 116. 117. 118. 119. 120. 121. 122. 123. 124. 125. 126. 127. 128. 129. 130. 131. 132. 133. 134. 135. 136. 137. 138. 139. 140. 141. 142. 143. 144. 145. 146. 147. 148. 149. 150. 151. 152. 153. 154. 155. 156. 157. 158. 159. 160. 161. 162. 163. 164. 165. 166. 167. 168. 169. 170. 171. 172. 173. 174. 175. 176. 177. 178. 179. 180. 181. 182. 183. 184. 185. 186. 187. 188. 189. 190. 191. 192. 193. 194. 195. 196. 197. 198. 199. 200. 201. 202. 203. 204. 205. 206. 207. 208. 209. 210. 211. 212. 213. 214. 215. 216. 217. 218. 219. 220. 221. 222. 223. 224. 225. 226. 227. 228. 229. 230. 231. 232. 233. 234. 235. 236. 237. 238. 239. 240. 241. 242. 243. 244. 245. 246. 247. 248. 249. 250. 251. 252. 253. 254. 255. 256. 257. 258. 259. 260. 261. 262. 263. 264. 265. 266. 267. 268. 269. 270. 271. 272. 273. 274. 275. 276. 277. 278. 279. 280. 281. 282. 283. 284. 285. 286. 287. 288. 289. 290. 291. 292. 293. 294. 295. 296. 297. 298. 299. 300. 301. 302. 303. 304. 305. 306. 307. 308. 309. 310. 311. 312. 313. 314. 315. 316. 317. 318. 319. 320. 321. 322. 323. 324. 325. 326. 327. 328. 329. 330. 331. 332. 333. 334. 335. 336. 337. 338. 339. 340. 341. 342. 343. 344. 345. 346. 347. 348. 349. 350. 351. 352. 353. 354. 355. 356. 357. 358. 359. 360. 361. 362. 363. 364. 365. 366. 367. 368. 369. 370. 371. 372. 373. 374. 375. 376. 377. 378. 379. 380. 381. 382. 383. 384. 385. 386. 387. 388. 389. 390. 391. 392. 393. 394. 395. 396. 397. 398. 399. 400. 401. 402. 403. 404. 405. 406. 407. 408. 409. 410. 411. 412. 413. 414. 415. 416. 417. 418. 419. 420. 421. 422. 423. 424. 425. 426. 427. 428. 429. 430. 431. 432. 433. 434. 435. 436. 437. 438. 439. 440. 441. 442. 443. 444. 445. 446. 447. 448. 449. 450. 451. 452. 453. 454. 455. 456. 457. 458. 459. 460. 461. 462. 463. 464. 465. 466. 467. 468. 469. 470. 471. 472. 473. 474. 475. 476. 477. 478. 479. 480. 481. 482. 483. 484. 485. 486. 487. 488. 489. 490. 491. 492. 493. 494. 495. 496. 497. 498. 499. 500. 501. 502. 503. 504. 505. 506. 507. 508. 509. 510. 511. 512. 513. 514. 515. 516. 517. 518. 519. 520. 521. 522. 523. 524. 525. 526. 527. 528. 529. 530. 531. 532. 533. 534. 535. 536. 537. 538. 539. 540. 541. 542. 543. 544. 545. 546. 547. 548. 549. 550. 551. 552. 553. 554. 555. 556. 557. 558. 559. 560. 561. 562. 563. 564. 565. 566. 567. 568. 569. 570. 571. 572. 573. 574. 575. 576. 577. 578. 579. 580. 581. 582. 583. 584. 585. 586. 587. 588. 589. 590. 591. 592. 593. 594. 595. 596. 597. 598. 599. 600. 601. 602. 603. 604. 605. 606. 607. 608. 609. 610. 611. 612. 613. 614. 615. 616. 617. 618. 619. 620. 621. 622. 623. 624. 625. 626. 627. 628. 629. 630. 631. 632. 633. 634. 635. 636. 637. 638. 639. 640. 641. 642. 643. 644. 645. 646. 647. 648. 649. 650. 651. 652. 653. 654. 655. 656. 657. 658. 659. 660. 661. 662. 663. 664. 665. 666. 667. 668. 669. 670. 671. 672. 673. 674. 675. 676. 677. 678. 679. 680. 681. 682. 683. 684. 685. 686. 687. 688. 689. 690. 691. 692. 693. 694. 695. 696. 697. 698. 699. 700. 701. 702. 703. 704. 705. 706. 707. 708. 709. 710. 711. 712. 713. 714. 715. 716. 717. 718. 719. 720. 721. 722. 723. 724. 725. 726. 727. 728. 729. 730. 731. 732. 733. 734. 735. 736. 737. 738. 739. 740. 741. 742. 743. 744. 745. 746. 747. 748. 749. 750. 751. 752. 753. 754. 755. 756. 757. 758. 759. 760. 761. 762. 763. 764. 765. 766. 767. 768. 769. 770. 771. 772. 773. 774. 775. 776. 777. 778. 779. 780. 781. 782. 783. 784. 785. 786. 787. 788. 789. 790. 791. 792. 793. 794. 795. 796. 797. 798. 799. 800. 801. 802. 803. 804. 805. 806. 807. 808. 809. 810. 811. 812. 813. 814. 815. 816. 817. 818. 819. 820. 821. 822. 823. 824. 825. 826. 827. 828. 829. 830. 831. 832. 833. 834. 835. 836. 837. 838. 839. 840. 841. 842. 843. 844. 845. 846. 847. 848. 849. 850. 851. 852. 853. 854. 855. 856. 857. 858. 859. 860. 861. 862. 863. 864. 865. 866. 867. 868. 869. 870. 871. 872. 873. 874. 875. 876. 877. 878. 879. 880. 881. 882. 883. 884. 885. 886. 887. 888. 889. 890. 891. 892. 893. 894. 895. 896. 897. 898. 899. 900. 901. 902. 903. 904. 905. 906. 907. 908. 909. 910. 911. 912. 913. 914. 915. 916. 917. 918. 919. 920. 921. 922. 923. 924. 925. 926. 927. 928. 929. 930. 931. 932. 933. 934. 935. 936. 937. 938. 939. 940. 941. 942. 943. 944. 945. 946. 947. 948. 949. 950. 951. 952. 953. 954. 955. 956. 957. 958. 959. 960. 961. 962. 963. 964. 965. 966. 967. 968. 969. 970. 971. 972. 973. 974. 975. 976. 977. 978. 979. 980. 981. 982. 983. 984. 985. 986. 987. 988. 989. 990. 991. 992. 993. 994. 995. 996. 997. 998. 999. 1000.

討 論

討 議 者 八 木 誠 一

今回のテーマは唯識研究ですが、「通念の克服と感覚の恢復」ということで、ハイジック先生には「宗教における通念の克服と五感の恢復」というテーマで発表していただきました。全体としてわが意を得たりという主旨であって、反対しななければならぬことはありませんので、私の考えを多少申し上げたいと思います。

禁欲の系譜をたどってみると、まず、ギリシア的な系譜があり、それには理性の感性に対する優位がありますが、さらに理論的な側面と感性的な側面が見出されます。感覚は正しい情報を与えず、正しい情報を与えるのはむしろ理性であるとされます。とりわけストア哲学では、意志によって肉体的な欲望を統制するという考え方がありました。ここにみられる克己という道徳主義はユダヤ教や儒教にもありました。それらは肉体性としての身体性を否定したわけではありませんが、そこには感性が劣ったものであって、意志によって肉体的な欲望をコントロールするという克己が理想になっています。罪悪というのは欲望であって欲望は肉体に由来するという道徳主義的な考え方があったように思われます。また、グ

ノーシス主義は単に理性ということではなく、むしろ霊性というものを重んじました。それは理性を含んだ肉体性と云えるかも知れません。それは此岸的な肉体性に対して彼岸的な霊性の絶対的優位を説いたが、広く現代まで尾を引いてきました。

ウェーバーによれば、資本主義社会の成立とプロテスタンティズムの関連があることが指摘されていますが、ここには禁欲が富の蓄積に役立ったと考えられます。

それに対して、一貫して禁欲に対する批判がいろいろあり、感性の複権ということがいわれています。一つにはニーチェがあつたように思います。それでハイジック先生の話を聞いていて、私はたびたびニーチェを思い出しましたが、これは決して悪い事ではないと思います。ニーチェは非常にまちがったところもあるのですが、性を含んだ生の直接性に対する鋭い深い感覚を持っていました。ニーチェは生の重要性を強調して、俗流プラトン主義やキリスト教が生を知に代えてしまったために、生を衰弱させてしまったと言つて非難しました。これはよく知られたことでもあり、重要なポイントであつて、ハイジック先生のご発表にも多々ニーチェを思い起こさせるところがあつたように思われます。

しかし、ハイジック先生の禁欲に対する批判の中心点はいろいろありますが、一つには現代の商業主義文明に対する批判があります。われわれは現代の商業主義文明においてから

だを使わなくなつてしまつたし、からだを使う喜びを見失つてしまい、からだをだめにしてしまつた。ここにニーチェとの接点が見出されると思われれます。ハイジック先生は現代の商業主義文明という点からみていらつしやる。それで、現状では感性の眞の喜びが見失われている状態があるが、宗教の中に感性を復権させる道があると主張されたように思われれます。そうすると、道徳主義が感性に対する意志の優位を説いていたとするならば、欲望が身体的なものと感じているとするならば、では、宗教はいったいどこに悪をみていたのか、ということになるのではないかと思われれます。そのことは、唯識の中ではつきりと語られてくるのではないか。この点については、ハイジック先生は宗教がいかに感性の復権の問題を克服していくのか、ということをくわしく語られてこなかつたように思われますが、しかし、唯識においては、ただ感性とか肉体性というものが悪ではなくて、言語を用いる分別知が問題であることが指摘されています。つまり、自我ないし末那識が分別知で働き、それが言語において働いているという、自我と分別知と言語の三つの結びつきが迷いを生じさせているのであつて、そのような迷いが正しいあり方——唯識で言えば依他起性など——を妨げているのであり、迷いが克服されたときに直接性が回復されるのだということがあるのではないのでしょうか。あるいは、宗教的な覚には、直接性を回復するということがあるのではないのでしょうか。

そうすると、悪の座は肉体性ではなくて、むしろ自我が言語を道具として分別知をもって働いているという結びつきにあるので、そのような迷いが克服されたときに直接性が現前して感覚が甦ってくるということがあると思われれます。これは、唯識だけではなくて、ハイジック先生が指摘されたように、キリスト教の歴史の中にもあるし、同じくトマス福音書や、原始キリスト教のイエスの場合にもかなりはつきりみられるのではないかと思われれます。禅の中でも弘忍和尚が昼時になるとご飯の入ったおひつをもって踊って「菩薩喫飯来」といって毎回食べるご飯がそのたび毎に新しい、はじめて食べるようにおいしくうれいという感覚の直接性、時間の新しさが甦ってくる証拠がある。

ですから、私も感性というものとても大切なものだと思うのです。一般に感性というものがあまり頼りにならないとはいいますが、そうではなくて、冷やした手でものを触れば温かく感じられるし、暖めた手でものを触れば冷たく感じられるというように、感覚というものが対象の客観的な性質に関する情報を与えているのではなく、われわれの生に対する意味を教えている、例えば、手が冷えているか暖まっているかという意味を教えていると考えると、感覚というものは意味があるし、かつ重要なものであると考えられます。

ただし、感覚が新しくなり甦ってきた場合には、もちろんそこには生きるということの喜びがあると思えますが、同時

に、感覚がそれまで鈍くなっていたとすれば、いろいろと苦しい感覚も生じてくる可能性があります。苦しさ、つらさ、いろいろなひずみなども見つけ出しますので、喜びだけではないですが、このようなひずみを見出すということが感性の重要な点であるように私には思われれます。

このようなわけで、私はハイジック先生のおっしゃったことに何も反対することがないので、非常に賛成であるということをお願いしたいと思います。

一歩進めた場合に、いろいろな問題が出てきます。なぜなら、どうやって感性を訓練するのか、ということが現代の状況では問われているからです。現代の状況の中では感覚がだんだん鈍くなっていったり、からだがだめになっていったりするものがあれば、それを訓練するのはいったいどこなのか、学校なのか教会なのか家庭なのか。あるいは、どうやって訓練するのか。単なる宗教の問題だけではなく、もっと一般性のあることです。学校がいきなり宗教教育をしない場合でも、やはりそういう感覚の訓練をすべきだと思いますが、いったいどうしたらよいのか。また、宗教教育の中に感覚の訓練をすることが重要であるというのは非常に重要であるし、私は賛成なんです。それがあんまりやられているとも思えないので、この点はいったいどうなのか。また、それだけでなく、感覚だけでなく食べ物や芸術にいたるまで本物をいっただいどのように育てるのか。だいたい本物がだめになって認

められないといった傾向があるのですけれども、本物を見出して育てるといふことは他方で感覚の鋭さがなければだめなので、どっちが鶏でどっちが卵かという問題のように思えます。つまり、本物が育てば感覚も鋭くなるし、感覚が鋭くなれば本物も育たないといふこの悪循環にどうやって対処するのか。また同じことですけれども、からだを使う喜びをどうやって教えていったらよいのか。これはやはり教育とか出版とかマスコミとか産業構造の全体にかかわってくることで、遠い道ではあるけれども、産業構造の全体にかかわってくるのかもしれない。むろん、それだけでよいとは私は決して思わないのですが。

さらに、その問題は性倫理の問題ともかかわってくると思います。特に、十九世紀に性がヨーロッパでもアメリカでも日本でも禁圧されました、逆に戦後、性の解放ということが起こってきて、これにはフロイトなどの影響もあったのかもしれないませんが、性の解放がエイズなどという問題をも生んできますから、性倫理の問題ともかかわってきますし、真剣に考えなければならぬと思います。

あるいは、カトリシズムの独身性といったものはどうなるのか。そういうことも問題になるのかもしれない。

司会者 それではみなさんの御討論をお願いしたいと思います。

河波 大乘仏教では、感覚論の展開が非常に重要な要素を占めています。例えば、初期大乘仏教の段階ですでに五眼、その他、眼耳鼻舌耳という五つの感覚の世界が全面的に展開されています。理性に支配されない空が逆に感覚を解放するような働きをもっていて、それが全面的に展開されるのです。また、世親の『浄土論』はある意味で感覚の救済論的な展開というようなところがあり、浄土があくまでそこで人間が完成されていく場所という見方がされている点が重要です。さらに、日本でも感覚という問題が非常に重要視されていて、茶道や法然や道元にそのことが明確に現われてきているのが指摘できます。

ハイジック 八木先生のコメントは非常に役立ちました。まず第一に、トマス福音書はからだではなく通念に反対したと思います。また、ストア学派も同様だと思います。第二に、感覚の回復の場合によっては苦しみを高めることになると思います。第三に、宗教が感覚の訓練に対していかなる役割を果たせるかはむずかしい課題だと思います。

河波 仏教が本当に生きてくれば感覚が生きてくると思います。それが疎外されているのは、近代の仏教の合理主義的な影響が感覚を抹殺してきた点と、ドグマ化した仏教がいわゆるミスティック（神秘主義）の豊かな展開を疎外した点が指摘できます。

大峯 感覚の復権については宗教の立場ではなくて芸術の立

場が感覚をどこまでも深めていくということが問題になりません。ルネサンス以降の精神運動の流れの中にある近代には美の復権があります。ただし、ハイジックさんのご指摘の通り、近代社会が感性の復権を主張した中で禁欲主義が進行しているという厄介な問題が確かにあるように思います。

八木誠一 今日、美が商業主義化されている点が問題ではありませんか。

大峯 確かにそうですが、言語が感覚的にならなければ感性の回復は望まれません。

川村 身体を強調したり感覚を解放するということにその身体を心や霊と一つになっている身体が考えられないと、現代の身体は欲望の肥大に結びつきますし、他方で、宗教の方では、愛、死、苦、無明といった観念で感覚が抑圧されて全然生き生きと生きられないような状況が見られます。今日また、新たな宗教教育のあり方が問われていると思います。

常盤 ハイジックさんが引用されたピンズル尊者の物語には多様な解釈があって、必ずしも感覚の回復を代表できるとはいえないのではないのでしょうか。

ハイジック 確かにご指摘のような問題があると思います。蜜の味で楽になった人には無明に染まった凡夫であるという解釈も存在しますね。

大峯 いままで一般に流布しているのは、今言われたような無明の立場による解釈だと思えます。

石田 ウィリアム・ジェームズの『宗教経験の諸相』では、トルストイからの話として人生をそのようなものとしてみるのは厭世的な見方であるとされていますね。

ハイジック 確かにそうです。

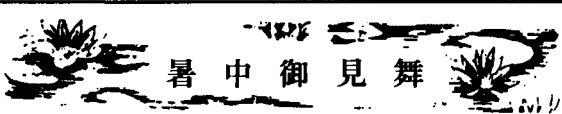
大越 現代では子どものことが問題になっています。例えば、拒食症とか登校拒否とか、自分自身の身体を絶対に受け入れないといった問題が生じています。子どもたちの身体の回復というのが問われていると思います。

ハイジック 私は美と宗教に関係がないとはまずもって考えられません。また、現代の身体論は女性の意識の復活と関係があり、身体論とフェミニズムとは深い関係があると思います。また、現代の身体とは魂や霊を含むものではなければなりません。ただし、現代の身体論は美や宗教とはあまり関係がないように思います。

八木誠一 最近の大脳生理学では、言語や論理的思考を司る左脳ばかり発達して、直観や感覚を司る右脳が未発達状態なのが問題という指摘がありますね。

本多 大脳の新皮質と旧皮質の乖離から失感情症が生じ、それが高じて失体感症になってくるという問題が指摘されています。したがって、感覚の復権とは、宗教的な問題だけではなく、心理主観的な問題であると同時に生理学的な問題でもあると思います。

上田 感覚の回復が自己目的化されるのは問題ではないでしょ



<p>正眼短期大学 学長 谷 耕月 505 美濃加茂市伊深町八七六一一〇 円通寺僧堂</p>	<p>恵林寺 404 塩山市小屋敷二八〇 不二般若道場</p>	<p>倉沢行洋 281 千葉市花園町四三</p>
<p>長谷川 大道 848 伊万里市松島町一四八 東京大学名誉教授</p>	<p>無方庵 森本雅堂 410-11 静岡県裾野市大畑</p>	<p>平川 彰 弁護士・法学士 関谷 宗李 310 水戸市大町二丁目一番七号 電話〇二九二一二一四〇三一 二一四〇四〇</p>
<p>文 博 早 島 鏡 正 232 横浜市南区中里三一二〇六 電話〇四五七三二一二六七九</p>	<p>長寿院 丸岡 円昌 378 沼田市材木町 串本忠挙芦雪館 紀州串本無量寺</p>	<p>藤 永 善 作 152 目黒区柿ノ木坂一二七一〇 電話 七一一四四〇</p>
<p>宝樹寺 大江 尊 貴 507-04 岐阜県加茂郡七宗町</p>	<p>東 条 光 顯 649-35 和歌山串本町 電話〇七三五六一二一〇四六八</p>	

うか。それから、感覚の回復とは何でしようか。さらに、宗教と感覚が結びつかなければならぬといえるのか。そして、そのとき禁欲をどのように考えなければならぬか。その意味でハイジックさんの「現代の禁欲主義に抗して」という副題が当初理解しにくいと思いました。

ハイジック 道徳、身体、感覚が三つ編みの形になって、理性的な悟りと補いあっているように思います。また、禁欲主義に関して言うと、主義というのは商業主義のように必ずしも理性的なものとは限りません。感覚の回復のためには必ず欲の回復が必要であり、その意味で私は禁欲主義という言葉を使いました。